

樋口一葉について

- ★ 小説家、歌人。本名、奈津、夏子とも書いた。
- 明 治 5年（1872）3月25日生まれ。東京内幸町にて。
- 明 治 29年（1896）11月23日没・24歳で夭折。肺結核で。
- 学 歴 小学校中退、3年程度の通学実績しかない。
- 師 : 明治19年 15歳、短歌は中島歌子に師事。
明治24年 20歳で小説は半井桃水に師事。
- 転 居 明治23年 本郷菊坂町（母と妹）、本人は中島歌子方。
明治26年 下谷竜泉寺（吉原遊郭近く）。荒物、雑貨、菓子小売り業開く。
明治27年 本郷に。
明治28年 「たけくらべ」が文学界に掲載。

樋口家の人々

○ 一葉の祖父・樋口八左衛門。 甲斐国山梨郡中萩村（今の山梨県塩山市）に於いて19世紀初めに出生。農民であったが、あまり耕作はせずに、絹物取引の仲買のような仕事をしていて。学はあり、漢詩文に親しみ、近くの子供に字を教えたり、字の書けない人々のために代筆をもしていたと言われる。嘉永5年（1852）水飢饉の際には、不当な割り当てに対して、村を代表して時の老中に直訴をして、2か月ほど入牢した。庶民の代表として、権威と争う反骨の精神が一葉のなかにも流れていた。

○ 甲州藩 鎌倉期より武田家が支配をしてきたが、滅亡後は徳川家が甲斐を手にした。代々徳川一族で支配をしてきた。18世紀の初めには柳沢吉保が藩主として任命された。華やかな発展をしたが、その子柳沢吉里を最後に幕府直轄地となった。享保9年（1724）のことである。甲州は金の算出があった。徳川吉宗は享保の改革時に、資源がある直轄領の増加を図り、財政の強化に努めた。佐渡（金）、伊豆（金）、岩見（銀）、日田（杉）、足尾（銅）等々である。

○ 天保飢饉 天保4年（1833）から同7年にかけて、全国的規模の飢饉であった。東日本地区で被害が大きく、大風雨、洪水、冷害に見舞われた。作柄も例年の半分程度、諸物価は高騰、餓死、行き倒れ、離散が相次ぎ惨状をきわめた。

○ 天保騒動 上記の結果もあり、天保7年（1836）甲斐国郡内地方で発生した一国規模の大きな百姓一揆であった。国中地方に広まり、石和、大月等で打ちこしが起こった。幕府は、これまで金産出の大きな恩恵を、甲州から受けていながら、見返りは、ほとんどなかったと言って良いだろう。あるいは、この頃は資源は枯渇していたかも知れない。

一葉の祖父も、飢饉の余波である、このような時代背景のなか、対策をいろいろと講じたが、直訴する以外に方策はなかったのであろう。

○ 一葉の父母。 父、大吉（後の則義）は天保元年（1830）に、八左衛門の長男として生まれた。百姓を好まず、儒学に心を寄せ、書法も学んでいた。やはり、書法を学んでいた美少女「あやめ」と親しくなり、恋におちいり、あやめは妊娠することとなった。あやめの母親が許さぬこともあり、安政4年（1854）に江戸へと出奔することとなった。大吉28歳、あやめ24歳であった。

大吉には野心があった。あやめの懐妊ばかりが理由ではない。当時、農民の出身者でも、志をたてて江戸へ出てきて働き、貯蓄をして幕臣の家禄を購入すれば、武士になれる。二人は江戸で知りあいをたどり懸命に働いた。その結果、慶応3年の幕府崩壊の3か月前に、やっとのことで士族の株を手に入れた。

○ 一葉誕生

樋口夏子（奈津）は明治5年3月25日（太陽暦に直せば5月2日）東京府内幸町の東京府構内の長屋で生まれた。父43歳、母39歳のときであった。父はその頃、新政府に仕え、他に金貸しも業としていた。3人の兄、姉がいた。

一葉の幼少期、父親の語る物語を聞いたり、兄たちが声を出して新聞を読むとそれを真似たり、10歳になるより前から、草双紙を読んだり聡明、多感な少女であった。そこでは「英雄豪傑」「任侠義人」を愛し、「金銀はほとんど塵芥」だと考えた。

○ 一葉の受けた学校教育は3か年程度、小学校さえ満足に卒業していない。通った学校は、本郷小学校、吉川小学校、青海小学校、いずれも幼少で通学が無理なことが退学理由。

父親は継続させたかったが、母親は「女子にながく学問をさせなんは行々のためによろしからず」という意見で、結局通学できなくなった。本人は大いに嘆き、悲しかった。しかしながら、夜ごと夜ごと文机に向かった。

○ 学校をやめた後家事の手伝い、裁縫の稽古に日々を送った。父親からは、和歌の集などを買ってもらった。13歳のときに、父の知人、和田重雄の門に数か月間、和歌を学んだ。

でも、長くは続かなかった。あるいは、今で言う通信教育みたいであったようであるその頃の歌に「おちこちに梅の花咲く様見ればいづこも同じ春風や吹く」がある。

和田重雄氏は、士族の出であり、本居宣長系、芝大神宮、神田神社等の神職にあった。

○ 中島塾（中島歌子の主宰する私塾・萩の舎）に、15歳のときに入門。和歌と書を教えた私塾。歌子は現在の埼玉県坂戸市出身の、両親は豪商、豪農の娘であった。この塾の生徒は上流階級の子弟がほとんどであり、ピーク時に1千人の塾生がいたという。

ここで、一葉の生涯をつらぬく文学の根底が形成されたと言っても良いだろう。日記的、自照的、雅文的な表現で綴る方向であった。三宅花圃とも知り合い、一葉が小説を書くきっかけとなった。

○ 半井桃水との出会い。そして別れ

一葉が20歳のときの明治24年である。桃水は、32歳で、対馬の出身、朝日新聞に通俗小説を

書いていた。彼から文学的影響はさほど大きなものではなかったが、一葉が作家として出発するために是非必要な人物であったし、いろいろと便宜を図ってもらった。桃水主宰の同人雑誌「武蔵野」で初期の作品3篇を発表してもらい、改進黨にも発表の機会があった。言わば、小説の師であった。

一葉にとって桃水は小説の師というよりも、秘かな恋人であった。彼はいろいろと一葉のために気を配ってくれた。仲の良さは広まっていった。そして、噂が、等々萩の舎でも問題となり、思いを残しながら、別れることとなった。1年あまりの付き合いであった。

苦悩、相克のなかに漂っていた。彼女は「恋は尊く、あさましく、無ざんなるものである」という心境に達したとされる。

一葉には、その短い25年の生涯を、貧しさとたたかいながら、一家の生活を支えていかなければならなかった。借りられるところから、誰からでも借金しようとしていた。みじめではなかった。貧しさをむしろ生活の糧としていた。

世の常の娘のような青春はなかった。確かに、一葉は、小説には恋物語をえがいているが、ひとつとして結ばれない悲恋であったと言われている。仮に結ばれたとしても、それは不幸な結婚であった。悲恋や不幸は人間の生の真実を証明するであろう。当時の日本の社会は、恋さえも成長できないようなところもあった。物質的なものについては、欧米に大きく依存し、飛躍的に発展していったのだが。まだ、恋とか女性の悲哀、社会的な地位とかについては、大きく遅れていた。

明治25年以降、幸田露伴らの影響下、「うもれ木」、さらには「ゆく雲」「にごりえ」「十三夜」等により作家として開眼。

「たけくらべ」の成功により、女流文壇の第一人者と目された。一年余りの期間に多くの作品を、集中して残した。事実、明治の小説を一篇だけ選び出すと「たけくらべ」になるらしい。日本の近代文学の中で不朽の位置を占めているとまで言われているとか。「一行読みて驚き歎じ、二行読みては打うめきぬ」とまで言われた。あるいは、これが女子であることの珍しさであるかもしれないが。題材も、吉原という興味ある土地柄をテーマにしていることも否めないであろう。

当時の日本の文学界の作家である、戸川秋骨、上田敏、島崎藤村、川上眉山等、当時活躍していた多くの作家たちと知り合う。そして、森鷗外、夏目漱石なども、一葉の作品を高く評価した。

しかしながら、24歳の人生はあまりにも短かった。大きな弱者救済の夢を持っていたのに。

樋口一葉、あれこれ

○ 名は奈津、なつ、夏子とも自署をした。明治5年3月25日、内幸町にて、東京府庁に勤める樋口則義と母たきの次女に生まれる。学校教育は小学校で授業を数年ほどしか受けていない。14才で中島歌子の歌塾萩の舎に学ぶ。

本が好きで親孝行であった。父則義、長兄泉太郎に先だたれ、次兄虎之介は家を出、女相続戸主として母たきに仕え、妹くにを守り、女3人で転々とした。

身長5尺足らず、髪はうすく、美人ではないが、目に輝きがあった。きわめて小食、近眼、肩こりで灸や揉み療治にかよった。洗濯、縫物などの手内職に明け暮れ、芝居に行く余裕はなかったが、ときには寄席に通い、寺社に詣でたり、よく町を散歩した。

士族の誇りを胸に、つつましく見えてもときに大胆、心根はやさしくときに辛辣。女であることを嘆きつつ、ときに国を憂えた。萩の舎において、明治の最上層を、下谷竜泉寺の荒物雑貨屋経営で明治の最下層を見た。

「おおつごもり」「たけくらべ」「にぎりえ」等の著作がある。優秀な頭脳と膨大な読書量に支えられた、近代初の女性職業作家であろう。

明治29年11月23日、肺結核にて本郷丸山福山町で死去。享年満24才。

○ 一葉は東京の以外には、一回だけ、埼玉の大宮にしか行ったことがないとか。その代わり、東京では内幸町、本郷、神田、芝、下谷、上野等を転々とした。

○ 読書量はかなりのものであった。「眼がふたつあるから二行宛読める。」「いちどに三行ずつ読んだ」「八犬伝を三日で読んだ」などの話が伝わっている。母が一葉の読書を喜ばなかったため、隠れて蔵で薄明かりで読んだために近眼になったと言われている。

○ 英雄、豪傑への憧れは長じても失われなかった。郡司大尉の千島探検、福島大尉のシベリア横断、清水の次郎長等についての書きとめた記録がある。

○ 一葉が九才のときの明治14年に、本郷の家を売り下谷御徒町に転居した。戊辰戦争の戦場に近く、この辺りは荒れ果てており、復興に余念がなかった。上野駅の開業は明治16年である。喧噪な交通の要地であった。近くの青海学校に入学。「行儀よく、物覚えもよかった。」ずば抜けた成績であった。ここを首席で卒業。でも、「金銀はほとんど塵芥のようなものだ」。のちに竜泉寺に転居したときは「金なくしては生きていけぬ」と実感した。

父親は学問を続けさせたかったが、母親の反対で行けなかった。「死ぬばかり悲しかった。」

その後、昼間は家事手伝い、裁縫の稽古。夜やっと文机に向かい自分の時間となり、読書、習字等を行った。

○ 一葉の作品の大半は、明治28年から、翌年の明治29年までの一年あまりに集中している。奇跡の「14か月」と呼ばれている。「たけくらべ」の連載を開始し、「うつせみ」、「にぎりえ」「十三夜」等々である。集中をしていた。一葉がもっとも輝いていた。そして、その年の11月に、24才の若さで、この世を去っていった。

一葉の作品は、明治という時代の女性を描いている。それも、作家として、女性がいかに深い苦悩と絶望、あるいは虚無感に見舞われていたかである。徳川時代の古い社会制度・から封建制度の時代から、文明開化という、欧米文化の移入、教育制度の整備、欧米流近代思想の流入、言論活動の活発化への時代は変化していく途中にあった。近代化推進政策、富国強兵政策等が優先されて、後手にまわってしまったのではないだろうか。

一葉の時代の女性は、二つのタイプの女性が描かれている、家庭内にいる女性と、遊里等にいる女性である。「たけくらべ」の主人公である『美登利』は、後者のタイプであろう。

明治という時代の『家父長制度』と『公娼制度』との関連で一葉を考えるべきであろう。

○ 明治日本は、家制度（家父長制的家族制度）を採用した。家の永続性と単一の系譜制のために、個々人の権利や自由は制約されることとなった。家長である父親が絶対的な権利を持ち、原則として男子相続とした。父親は子供に対し、夫は妻に対して優位であった。

女性でありながら戸主であった一葉は変則的であった。

公娼制度も、江戸期にあった遊廓の継続、娼妓に対する非人間的な待遇を引き継いだ。

○ 一葉は、生涯で、ほとんど学校教育を受けていないが、とにかく幅広く本を読んでいた。とりわけ古典の教養は、現代のわれわれのかなうものではない。晩年、安井てつ（のちの東京女子大学学長）などに『源氏物語』の講義をしたほどだ。しかし、家にはそう本はなかった。友人から借用した。そしてわが国初の公共図書館で、上野にある東京図書館に読みに行った。有料であった。数時間のこともあり、弁当を持参して行くこともあった。

帰りに、池之端にある蕎麦屋に立ち寄った。

彼女の父親は、一葉の文才を愛し、家計に余裕があったころは万葉集、古今集、後拾遺集、千載集、新古今集などを買い与えていた。この時代はまだ近代出版の草創期で、創作や新刊は少なく、近代の翻訳が大勢を占めていた。

それだけでは、当然、物足りなかった。ある時には友人の前島菊子から饗庭篁村（あえばこうそん）の『むら竹』や黒岩涙香の小説を借りて、夜中まで夢中になって読みふけた。さらには、『栄花物語』、『平家物語』、『源氏物語』、『日本外史』等々も友人より借りた。

上野の図書館にも、入場料を支払い、頻繁に通った。なかには、中国の明代の書物である『五雜俎（ござっそ）』を手にした。滝沢馬琴の著書によく出てくるからだだが、難解で歯がたたずに、すぐに戻したという。

冬の夜には睡魔が忍び寄ったとき、氷のような水をかぶって眠気を覚ましたり、足元を錐で刺したりもした。読書も難行苦行である。

半井桃水の見た一葉の後日談。

○「どちらかと言えば、低い身であるのに、少し背をかがめ、色艶の良くない顔に出来るだけの愛嬌をつくって、静粛に進み入り、三つ指でかしまって、ろくろく顔も上げず、昔の御殿女中がお使者に来たような有様」

「着物も年寄りめいて地味で、薄い地毛で銀杏返しを根下がりに結い、飾りもないので、さみしい感じだった。」

「私を見た女史は普通よりも物優しい憐れっぽい謹慎の深い、恥かしがりの苦勞性で、到底恋愛というようなことを思い立つ程の余裕もなく、いずれかと言えば偏屈な年に比べれば四五十も心の老いた婦人でありました。」これらは、一葉の日記に記載されている。

○桃水は、一葉が死ぬまで忘れられなかった人・心の故郷であった。一葉のもとを訪問しながら、自分への言及が少なかった島崎藤村や泉鏡花が憤然としたという。一葉がそれほどまで桃水を恋していたことは、周囲には衝撃であった。

○平田秃木（ひらたとくぼく）などは、桃水に対して反感むき出しであった。「半井氏は歌沢（うた

ざわ・端唄の一種) や端唄の作詞家として今日僅かに記憶されているが、今の大眾小説にも及ばない新聞小説の職業作家で、文学史上に於いてはさらに価値のない存在なのであると。」こうした、反感、嫉妬、詮索に対し、桃水はとりあわなかった。

○一葉の思いは、片恋のようで、かわいそうである。あるいは、日記は、単なる願望の表現であったかもしれない。

○この日記を見た桃水は「女史を最もよく知ったつもりの私は、一番女史を少しも見ることがなかったと知り恥じている。」と。また、桃水の縁者によると、「彼が一葉の求愛を素直に受け入れなかったのは、以前の亡くした愛妻への心の操があり、器量好みであったからではないか」とも言っている。

○その後、明治40年になってようやく結婚、大正15年に67才で逝去した。晩年は邦楽三昧であったという。

◆参考資料

樋口一葉研究 松坂俊夫 教育出版センター

樋口一葉をよむ 関礼子 岩波書店

時代と女と樋口一葉 関聡子 NHK出版

一葉の四季 森まゆみ 岩波書店

たけくらべ 松浦理英子 岩波書店等